＊以下は、サイトトップの「essais〈書く〉」から「どのようなPAか」の11月11日付から集約したものです。（2025年1月24日）

2024年11月11日（月）　晴れ

— どういうPAか　(3)　—

ケース２として「見える仕事の見えない働き」を書いた。たぶんこのことをじっくり見直し、紐解いた方が意味がある。

同じようなことをしても、うまくいっている人とそうでない人の差は、案外「能力」以外の、些細な、目にみえにくい小さな動きや働きかけに依ると見こんで久しい。仕事柄、たくさんの人の想いと実践をみることになるから、自他ともに観察が進む。自分なりの見立てがうまれる。

スケールは全然ちがうが老子や孫子も「微なるもの」の感知、察知を説いている。〈見えない働き〉に焦点をあてるのは大事なことだろう。

一方、「ほぼ確からしいと思える仮説あるためには７つ８つあるいはそれ以上の事実が同じ一点を指している必要がある」（中井久夫）と諭す。これを励ましと捉え、あらためて「見える仕事の見えない働き」をテーマに掘りさげてみるとしよう。

「見える仕事の見えない働き」①

独立して序章10年の中で一番の教訓というか、気づきになった仕事がある。流通センターのリニューアルを進めるトップのアシストした時だった。やることは多岐にわたる。外部の複数の業者とのやりとり、内部の担当者社員たちと協働し、大引っ越し作業の下準備、当日の行程立案等など。

でも大きな仕事も小さな仕事も小さな仕事の積み重ね、無理のないタイムスケジュールが組まれていたから、事は順調に進んでいた。ただ一つ、相手に押されて、目をつむったのがいけなかった。

2024年11月13日（水）　晴

11日のこの覧は７日のままになっていた、いま気づいた。今日は昨日に続き晴れ。風が微かなので、いい日和。せいぜい今のうちに歩いておこう。

―　どういうPAか　（3）　―

「見える仕事の見えない働き」①　想像すること

何に目をつむったかというと、数ある商品棚にカテゴリーごとの標示を現場責任者に勧めたのだが、「みんなわかっているから大丈夫」と事も無げにいわれ、断念した。

もちろん重ねて2度言った。事務方も参加し、現場を知るたくさんの人も散らばって作業する大引っ越しだから、どこに何があるか、何を置くかぱっと見てわかるようにしないと作業効率が低くなる。そこかしこで、「これ、どこですか？」と大きな声があがる様子が想像できる。

それでも、「大丈夫、大丈夫」と意に介されず、仕方なく断念したのだった。本社社員も総出の引っ越し当日、案の定、「どこに何を置けばいいか、わからない、もう！」という苛立ちの声が聞えた。

あーぁ…。それでも大きなトラブルもなくメインの大作業が済んでほっとした。そしてこの一件は大切な学びを授けてくれた。まず、“ひょっとしたら、事と次第のちょっと先を想像できる人は意外にそう多くない…？”と、初めてそういうことに目が向いた。

そこで思い出したのが会社員時代の一件。会社が商品の取り込み詐欺に遭いかけた。営業担当者が代金の支払いを何度も催促していた。たまたまその電話をしていた時に本社の社長がやってきた。

中小企業の創業者らしいというか、なかなか凄みのある社長で、やりとりを聞いていて、「電話、かわれ」。先方も、詐欺をするぐらいだから、やり手に違いない。電話のやりとりは、先方の声は聞えないけど、社長の返す言葉で想像できた。なかなかの〈聞きもの〉だった。

最後に社長の放った一言、「よし、それならわかった、俺もこのままではおかんから、おぼえておけ」。けっして大声を張り上げることなく、笑みさえ浮かべて、ドスを利かせた。

とりあえずこの日はそれで終わり、翌日対応策を話し合うために社長がまたやってきた。担当者たちとミーティングをしていたそのとき、運送会社の人が入ってきて、たくさんの荷物の配達だという。

玄関そばのミーティング中の一人が、どこから？と尋ねると、当の詐欺会社からだった。「えっ？、むこうから余計なものを送ってきたのか？　受けとれない、受けとれない、持って帰って！！」

「えっ、商品じゃないんですか」と声をかけると、ミーティング中の全員が顔を見合わせ、あわてて一人が外へ出て確認、商品が返送されてきたのだった。外の声を聞き、社長がこちらを見て、「助かったな！」とニンマリ。

あの電話のやりとりを聞いていたら、先方からの配達と聞いたときに、商品返送を直感する。想像するところ、先方は、“これはヤバい”、ここで何とかしておかないと後がコワイと覚った、そうに違いない。ここは諦めて商品を返すのが得策と判断するはず。そう想像できないか？

2024年11月15日（金）　曇

今日は朝から曇空、予報では夕方に少し雨が降るらしい。日曜までは高めの気温が続くらしい。昨日の帰り、地下鉄は冷房がかかっていた。それでちょうどぐらいだった、11月も中旬だけど。

―　どういうPAか　（3）　―

「見える仕事の見えない働き」①　想像すること（続）

今では遠い昔だが、正社員でいくらでも転職できる時代があった。先の中小企業もその一つだった。本社の社長の弟が支社の代表を努めていた。凄みのある兄とちがって、見た目の優しい顔つきと高めの音程で早口で話すところが〈お人よし〉な印象を与えた。ただ計算高い点はあった。

　ある日、取引先の部長が支社にやってきた。事前に連絡はなかった。さいわい代表は在席していた。力関係としては、こちらが上であった。オープンな面談スペースに迎いいれ、小一時間ほど話していた。内容は自然に聞えてくる。

　話がおわり、先方が出ていったと同時に、小声で「何しに来たんや…」と独り言のように代表。出したお茶を引きながら、「ほんとですね」と返した。すると、「えっ?」とこちらをみて、「どういう意味はわかるの？」と代表が意外そうな顔をして返ししてきた。「わかりますよ」

　やりとりは全て聞えていたから、他愛のない話が続いていることにヘンな感じがした。事前連絡もなく、こういう話をするために来たはずではないのではないか。目的はあるけど、言い出せずにいるのか、それとも、単に親交を深めたいだけなのか、それだといたら、あまりにラフすぎる。だから、何しに来たんだろうと思っていたのだった。今もよく憶えている一件。

　状況を頭に浮かべる、想像する。それは具体的な何かをしなければならない時に、何をした方がよいのかの判断の適切さを左右するだろう。会社員時代から、ある程度はイメージできて、仕事してきた。そういうことを特別視したことはない。流通センターのアシストの一件が初めて。

　その時こころに刻んだ。仕事上で、特に下準備にあたるような作業の場合、相手が軽くみていても、それに同調せず、想定できるとことをできるだけ詳しく伝えて、簡単には妥協しない。そう自分に言い聞かせた。その時の感覚は今もしっかりカラダが憶えている。

2024年11月20日（水）　晴

今日は一日晴天のよう、気温は15°C前後、陽も照って、散歩にはちょうどよさそう。紅葉もすすんできた。クリスマスツリーもそこかしこにお目見え。この季節らしい雰囲気。

―　どのようなPAか　（3）　―

『見える仕事の見えない」働き』②　口に出すこと

10代の頃は無口だった。あまりにしゃべらなさすぎて、逆に気になると言われたこともある。友人や先輩たちのグループで会話に入ることはほとんどなかった。さめた感じにみえるのが、関心をそそったのか。

親しい友人との二人の会話の場合では、２時間ぐらいは普通にしゃべっていた。おたがいの現在のこと、未来のこと、はたまた社会のこと、本のこと、等など。話は尽きることがない。

ほどほどにして珈琲専門店を出た帰り路、友人が満足げな表情で言ったことが今も鮮明に憶えている。「あんたとやったら、何時間でもしゃべれる！。たしかJR京橋駅の高架下あたりだった。

こんな感じだから、全体としては静かな、落ち着いた印象の10代だったろうと思う。友人たち５人の間で行き違いがあった時、一人が偏った正義感を振りかざし、みんなを詰問し始めたことがあった。おもわず声が出て、諭した。普段の無口が功を奏したか、事は納まったから。

成人してからは、さすがに無口ということはなくなった。たわい無い話は受け身で、ふみこんで話すような内容でよく話し合った。当時はまったく気づいていないけど、いま思えば、「なぜ？」が、思考の水面下でちゃぷちゃぷしていたのかもしれない。

2024年11月22日（金）小雪　晴

今日は19℃まで上がるらしい。朝から晴れた空が広がる。といっても、堺筋は幅が狭いから、見上げる空は小さな画枠。そのぶん青さが際だつ。風は微か、散歩日和。

―　どのようなPAか　（3）　―

『見える仕事の見えない」働き』②　口に出すこと（続）

会社員時代、最初に働いた時から上に「物申す」人間だった。たまたま男性ばかりの会社で、若くても女性ということで大目にみられたのかもしれない。

もともと、まったくキャピキャピしていないし、物言いは落ち着いているので、“何か申し入れをするからにはよほどだろう…”という印象は与えたと思う。とりえずは聞いてみようと。

最初の会社でもその後も、どの人からもスルーされることはなかった。先の「想像すること」のエピソードの会社ではこんな風だった。ある日、「ちょっとお時間よろしいですか？」と社長に言った。

背丈があり、切れ者で、経営者仲間からも一目おかれているその社長、何をいわれたか咄嗟にはピンとこない様子だった。「いま、お時間、大丈夫ですか？」と重ねて初めて、「ああ、いいよ…」。

「じゃ、社長室で」と促したのはこちらだった。すこし戸惑うように自分の専用室へいく社長の後ろをついていき、応接セットのソファにすわった。社長は、コワいようなうれしいような、そんな微妙な表情で。「それで、何？　どうした？」。

話したのは事務の流れと連係の話だった。現状を伝えて、自分の思いつく改善点を話して、検討してほしいと伝えた。社長はまず話の内容に安心したようだった。しだいに満足げな表情になった。個人的なことではなく、仕事全体をみての話だから会社のためになる。

会社員最後の会社は半官半民のような外資企業だった。ここでは別部署の上司に一度、そして退職を決めて最後の日の前日に、トップのマネージャーに一つ提案して辞めた。それがすぐに採用されたと元同僚が教えてくれた。

それにしても、なぜこういう風にするだろう、できるのだろう。

2024年11月27日（水）　曇

今朝はまだ曇空、徐々に晴れてくる予報だったが、ほんの薄日。このまま夜にまた雨のよう。昨夜11時前に5妙ぐらい揺れた。震源は近畿か、いやひょっとして…、スマホを開くと能登で震度5弱。元日を思い出した。

―　どのようなPAか　（3）―

『見える仕事の見えない働き』②　口に出すこと（続2）

ずっとやってきたことを、そのままでもできないことはないけど、手順ややり方を少し変えるだけで、もう少しスムーズに事が運ぶ。そう見てとった時に、責任者でもなんでもないのに、それを口に出す。

組織の末端にいる人間でそうする人がいる、いないなんて、考えたこともなかった。ムリやムダがなくなって、仕事がしやすくなるから全体にいいのではないかという、ごく単純で淡白な認識だった。

でも、なぜそうするのか。今回、ひょっとすると、「思考の型」と関係しているかもしれないと、初めてそこに目がいった。「思考の型」については2019年4月の臨時レターに載せている。
LEESletterNew20190405.pdf

典型的な「面型」、全体の構造が漠然とでも把握できていないと、わかった感じがない、情報が頭に入りにくい。

中小企業診断士の受験勉強の仕方が象徴している。中小企業施策の全体構造を図形ソフトで組立ていった。完成してプリントアウトした紙面を勉強仲間が見て、感嘆。でもその紙はもうあまり役に立たない。作る過程に意味がある。

部分の仕事が他の部分とどうつながっているか、なぜ自分はこの仕事をするのか。全体は何か目的をもってやるのだから、その部分のところでも、その根本がわからないとやる意味を感じない。そういう思考パターンなのが、影響していそうな気がする。

ただし、時に、「空気が読めない」存在になり得る。

2024年11月29日（金）　曇→晴

　夜中に雨が降り、風も強かったが、断片的でヘンな感じがして睡眠を妨げられた。早朝もまたパッと降った。これから徐々に晴れてくるようだけど、イギリスでは洪水で被害すごいからしい、韓国では観測史上最大の積雪がなったらしいし…。

―　どのようなPAか　（3）―

『見える仕事の見えない働き』②　口に出すこと（続3）

　かれこれ25年ほど前、独立してからのこと。誘われて参加した診断士グループの例会。メンバーは旧知の人たちばかりだから、例会には初参加だけど、新参者の意識はなかった。いつも例会がどんな風かわからないので、まずは様子をみる。ちなみにメンバーはみな男性で4名だった。

　“なにをしてるのかな…”。しだいに疑問がわいてきた。共同で受託したコンサル案件の担当をどうするか、リーダー担当の人が皆にふる。率先して引き受ける人はなく、のらりくらりの返答。

　いったん別の検討事項へ移る。次年度のリーダーを誰かするか。これまた遅々として話が進まない。ちょっと目が点になった。自分たちの仕事からして、こんな会議の仕方をしていていいのか。

　「ちょっと、待ってください、この例会は何のためのものですか？」。口火を切ってしまった。感じていることをはっきり言った。メンバーは意表を突かれた感じだった。

　こちらの真剣な表情とあきれた感が漂っていたのが功を奏したか、その後の進行が変った。終わってから飲み会にもなった。一人が、「いや、よかった、こんな例会は初めて！。

　初めて、とは内心あきれたけど、ひょっとすると目にみえい不文律があったのかもしれない。リーダー担当の人はリーダーをやりたい。受託案件も自分がメインになりたい。他のメンバーはそう気づいているから、白けている。なら、解散すればいいのに、対外的にはボリューム感をだせる

だとしたら、こちらが空気を読めず、余計なことを言った。でも自分ｊではそのつもりはない。そういうグループの一員でいることは自分の思考性がゆるさない。すぐにメンバーからはずれることにした。

2024年12月6日（金）　晴

日の出時間はまだまだ遅くなっているので、同じぐらいの時間に家を出て空は朝を待つ感じ。昨日は曇が多かったけど、今日はよく晴れそう。明日は「大雪」。

―　どのようなＰＡか　（３）　―

『見える死後との見えない働き』②　口に出すこと（続４）

口に出す。異論もとなえる。こちらはそうでも相手がそうでなければ、たぶん相手は、自分のない面をみて好感するか、逆に嫌悪感を持つか、はたまた同じように口に出すタイプで敵対視するか。

嫌悪感をもつ人は、先方から距離をおくようになるのが常。敵対視する人には、こちらが距離をおくようになる。人間関係でのトラブルがあまり無いのはそのおかげ、そう捉えている。口に出すことは、相手に判断材料を与えることでもあるし、こちらにもまたそう

口に出す、といっても何でもかんでも、といのでなく、肝心なこと。何を肝心なことと考えるかは人によって違うだろうから、そこにその人のパーソナリティー、アイデンティティが表れ、それぞれの人物像につながっていくのかもしれない。

利害関係があったとしても、いざという時には、一個の人間どうし、対等という精神が根底に眠っている。平時は立場をわきまえて振舞っている、つもり。でも、事と次第によっては、得たものを無くす覚悟で、正面から対抗する。実際、そういうことがあった

2024年12月11日（水）　晴・曇

今日も昨日と同じような天気。日向を10分ほど歩くと、マフラーをはずしたくなる。昨日の昼にまた淀屋橋まで買い物がてら歩いた。オービックビルの「ストリートピアノ」はまた誰も弾いていなかった。土曜は弾き手の行列ができるらしいけど。

『見える仕事の見えない働き』②　口に出すこと（続5）

目にみえる利益を断念する覚悟で取引先に「モノを申す」。その一件は事務所をもって２年も経たない頃であった。内容は４年前の「ひと言ひとり言vol.2」で話した。

自分の気持ちや考えをはっきり伝えることを避ける人が多いようだけど、避けないことで、相手に適切な判断材料を与えて、人間関係のストレスやトラブルを軽減できると過日書いた。

軽減できる以上に、関係が深まる場合も少なくないから、「コミュニケーション」の妙味やいかに。あの一件でとった自分のスタンスと方法は、我ながらよくやったと、後にふり返った。

でもエライのは自分ではないとも気づく。先方の度量のおかげ。こちらのアプローチを、正面から受けとめ、許容し、一件落着に治めてもらった。人によっては「無礼！」と一蹴されたかもしれない。

この一件以降、明らかに先方の見方がかわった。契約満了後もずっと音信は続き、今も続いている。1996、7年の頃からだから、30年近くになる。独立初期のこの一件の学びは大きかった。

今から６年前には、まったくタイプの違う別の「口に出すこと」の大きな一件が仕事先との間であった。これはもっと時間が経ってから話せるなら話そう。それほど貴重で大きな経験であった。

真意、本心、意志を「口に出す」。その行為は厳然として、いたって静か。結果は、未来に前進的で躍動的。「口に出すこと」の意味、意義、イメージを、今のところ、そうとらえる。

仕事柄、「口に出すこと」は仕事である。明確な助言を口にするのは〈見える仕事〉である。しかし、その前後の隙間、あるいは時間差の合間で発することがある。それは〈見えない働き〉といえる。

『微なるかな　微なるかな　無形に至る
神なるかな　神なるかな　無声に至る』（孫子）

2024年12月17日（火）　晴

今日も朝からよく晴れている。昨日と同じようなお天気。冬の天気が安定してきたせいか、よく眠れる。もっと寒くなる時のために寝だめしているのかもしれない。寝る大人も育つ？

―　どのようなPAか　（３）　―

『見える仕事の見えない働き』③　媒体になること

中之島公会堂には小さな貸会議室がいっぱいある。その一室で韓国語の教室をやっているのを見つけた。1990年春のことである。韓国と交流のある弁護士事務所が主宰していた。

先生は当時の大阪市大に留学していた二人が交代で教えていた。日本文学専攻の人なつっこい男性と中国哲学のキリリとした女性。留学をおえて二人が本国へ帰り、教室がなくなるまで通っていた。

女性の先生のある日の教室、テキストと関係してのことだったか、先生の研究活動について話を聞く流れになった。物静かで、日本流にいえば、おしとやかな感じの先生の真面目な研究姿勢がよく伝わった。

知の蓄えが凄いんだろうなぁと感服した。自然に口をついて出た、「本を書くとか、そういうことはされないんですか？」。

すると表情からしても全くその気がないとわかるほど、首を横にふりながら、「ただ好きでやっているから」。

なんとなくそれ以上立ち入ってはいけないと感じたので、口には出さなかったが、“それでいいのかなぁ…”と異存をもった。特定の、それも誰でもが学ぶようなものでない分野の体系的な知、無理強いすることはできないけど、社会的資源でもあり得るわけだから

前回の「口に出すこと」と同様、面的思考の型がこういった感覚のベースにもなっているのかもしれない。人間が最大の媒体という暗黙の了解は、独立するずっと以前からあった気がする。

2024年12月20日（金）　曇

明日は冬至、「冬至」という奈の梅がある。大阪城公園の梅林に数本ある。早めに梅林を訪ねる、これも年の瀬の個人的〈儀式〉。

―　どのようなPAか　（３）　―

『見える仕事の見えない働き』③　媒体になること（続）

書籍や講演など、世に出た知だけが知ではない、市井の人々の内にある知もふくめて人類の知なのだ、と「柳田国男」がどこかに書いていた。見逃しがちなことをしっかり押さえてもらった感じがしたのを今もよく憶えている、もう30年ちかく前のことだけど。

大抵の人は、よいことは人に伝えたくなるのではないか。社会的な生き物だから本能的にそうなるのだと思う。あとは程度の差。パーソナル・アシスタントという概念で仕事をしようと志すぐらいだから、その程度は平均より高いと今では自己評価する。

仕事とはまったく関係ないけど、仕事先の旧知の人に、あとでわざわざメールしたことがある。相手先で別の人と打合せがあり、その帰りにばったり会った。

先方も急いでいたようなので、簡単に挨拶してお互いわかれたが、これまで見たことのないほどキラキラとした表情があまりに印象的で、これはご本人に伝えなければと感じたのだった。返信には「うれしい！」。

今もそうだけど、ずっと以前から公私をとわず、何か案内をもらって、他の人にもためになりそうなら、自分の周りにアナウンスする。リーズレターを配信した時からそうしている。

その当時、友人の一人からこんな風に言われたことがある。「自分が行かないのに、なぜ案内するかな」。“私はそういうことはしないけど”という感じで、答えを待つ話しぶりではなかったのでスルーしたが、なぜダメだんだろうと自分の中で反問した。

もちろん行くこともある。先月も陣中見舞いに「きんつば」を持って、もう７年ほど続く催し会場を訪ねた。旧知の主宰者の頑張りに敬服する。孤軍奮闘は続いているが、活動の輪は確実に広がっている。

立ち話に今後の展開への模索を聴く。これに応えて、役に立ちそうな何点かを伝える。こういうちょっとした隙間の伝達がのちに意味を持つことは少なくない。そういう認識をもって久しい。

2024年12月23日（月）　晴

北陸、東北には大雪の予報。気象が激しい。他府県のことでも最近はいつ自分たちのところもそうなるかわからないという気になる、さすがに大雪はないだろうけど。まずは今週一週間は穏やかな予報。

―　どのようなPAか　（３）　―

『見える仕事の見えない働き』③　媒体になること（続2）

そもそも自分の人生を大きく変えることになった独立は、他者が口にした素朴な疑問が始まりだった。「どうして転職することばかり考えるの？　なぜ自分でやることを考えないの？」。

大阪ＹＷＣＡの社会人対象のコースに入り、ニュージーランドのジャーナリストの講師がはなった一言だった。入学動機を尋ねられて、受講者の全員が同じように回答したものだから、いかにも不思議そうに、みなの顔を見回しながら、言ったのだった。1989年春のことである。

いまほど起業が当たり前でなかった。そんな簡単なことじゃないと皆で反発したが、彼は事もなけに言ったのだった。「簡単さ、電話とファクスとパソコンがあれば、自宅を事務所にいくらでも開業できる、要は、ここだ！」と言って、人差し指を頭にあてた。着想、発想、知恵…

翌年３月に卒業し、しばらくして外資へ転職したものの、組織に所属するかぎりはどこへ入っても大差ないと感じ始めた時、あの一言がよみがえり、1991年に独立したのだった。

まったくそういう志向はなかったのに、そうなる。些細な一言が他の人生を一篇させることになる。それほどのものだと、自分の経験からもわかった。当時も一つの学びだと感じたが、あとあと、響いてきた大きな学びだった、「パーソナル・アシスタントにとっては

仕事では当然として、仕事とは関係ないところで、こちらがその役割を果たすことがある。一番印象的な実例は、知人の診断士に、「話を聴いてもらいに行ったら」と勧めれて訪ねて来た男性だった。

知人からは「仕事のこととか、いろいろあるようで、ちょっと話を聴いてあげてください」と頼まれた。聴くぐらいならという感じで応じたが、なぜわたしなのかという気はどこかでしていた。

たっぷり３時間近くは事務所に居たのではないか。これといって決まった相談事があるわけでもないので、話を聴いて、それに答えて話て、そんな時間であったが、話すだけでもすっきりするもので、帰りには少し晴れた表情だった。

それからどのぐらいたった頃だったろう、お礼のメールが届いた。訪ねた時に教えてもらったある専門分野について、独学し、今は独立して活動するようになったと書いてあった。

ちょっとびっくりした。その事はほんの参考程度にいう感じた話したことだった。ご本人の話を聴いているうちに、合いそうな気がして紹介したまでだった。それが本業になり、追って本を数冊出版するほどになった。

知人は、こういうことを暗に期待して、男性に勧めたのだろうか。

2024年12月25日（水）　晴

今日は冬晴れ、風もなく穏やかな天気。今日のクリスマスがおわれば、一気に迎春ムードへ。

―　どのようなPAか　（３）　―

『見える仕事の見えない働き』③　媒体になること（続3）

最初に事務所をもったとき、定期的にリーズサロンをやっていた。軽食とワインを用意して自由に語らう。

なぜ始めたか。公私ともに自分の知る人たちが自分とだけ接点があるのはもったいない気がした。多様な人たちがいるのだから、その人たちが交流すれば、おたがいに何かためになることがあるのではないかと。

　そのうち、知人が知人を連れてきたりして、愉しんでいた。ただ中には、目的がわからない、なぜこういうことをやるのは理解できないという人もいた。他の目的があって、カムフラージュしているかのように受けとめる人もいた。

　これにはちょっと驚かされた。でもしだいに少し〈世間〉をかい間知るようになって、理解できなくはない。居合わせた人と、互いの考え、意見などを交換し、異論も反論もいえば、もちろん共感もする。よほどの安心できる場でないとそうしないのが普通だと教えてもらった。

　「そもそも、自分の考えをもっている人がどれほどいるか」。常連参加の一人がそう言った。どういうこと？　当時は聞き返した。いまは言わんとすることが何となくわかる。

　30年近くも前のリーズサロン、当時の常連みんなもこちらも、すっかりよい年齢だけど、続いている人とは続いている。

2025年1月6日（月）　雨

　元日から昨日まで京阪神は穏やかな天気に恵まれた。ずいぶん乾燥していたから雨もよし、小降りだからそう思えるのだろうけど。

―　どのようなPAか　（３）　―

『見える仕事の見えない働き』④　奉仕すること

　「奉仕」をgoo辞書で調べると、一番目の説明は「神仏、主君、師などにつつしんでつかえること」となっている。２番目が「利害を離れて国家や社会などのために尽くすこと」。どちらも崇高すぎる。

　英語の「ボランティア」の方が合っているかもしれない。英語では、「誰かこれやってくれない？」と先生が生徒に尋ねる場合などに使ったりする。「志願者」という意味から、自主的に何かの活動や仕事を無償でやることを指す。

　『無意識にやって人に喜ばれること、それが本物』（佐藤初女）、この言葉に出会ったのは2014年6月のことだった。事務所をもって20年目の年にあたり、自他ともにわかってきた、見えてきた感じが自分なりにしていた頃だった。

　無意識に、ごく自然に、まったく負担に感じることもなく、見返りをもとめず無償で自主的に人のために何かをやる、できる。たぶん、それが続いている理由だろうし、何より「パーソナル・アシスタント」という概念を発想できた根本。そんな風な目線をもったのだった。

　さて、その自分の目線は正しいだろうか。紐解いてみるとしよう。

2025年1月8日（水）　晴れ

　今日もまずまずのお天気、ただし冷え込んでいる。金曜にかけて京阪神でも雪がふる予報。すっかり日常にもどっているけど、正月もまだ８日。明日から「戎さん」だし、３連休になるし、もう少しお放月気分でも許される？

―　どのようなPAか　（３）　―

『見える仕事の見えない働き』④　奉仕すること（続）

　10年ほど前になるが、ある交流会でたまたま居合わせた人が自己紹介の中で、「仕事とはいえ、ながながと聴いてられませんからね」と言って、カウンセラーを仕事にしようと考えたけど休止中だと話した。

　“そういう人がそういう仕事を目指すのはダメじゃないか…”。とっさに口に出かけたが、おさえた。それにしても、なぜカウンセラーを目指したのだろう。そこが不思議だった。

　最初の事務所の時はいろいろな人が訪ねてきた。わけのわからない業で事務所まで構えた女性がいると、興味をひいたようでもあった。知人がその知人を呼んで、一緒に、または単独でやってきた。

　ある日おとずれたのは起業してまもない男性だった。メディア関連のその事業はけっこう注目を持たれていた。当所にやってきた目的は特になさそうで、単に「人となり」を見にきたんだろうという程度で迎えた。

　実際おたがいの仕事のことや、なぜその仕事なのかとか、たがいの問意識や想いなどを話し始めた。ただ、そのうち気づいてきた、相手は自分の話を、いたってプライベートな話も一生懸命するけど、こちらが話しだすと、顔の表情が「うわの空」。ひょっとして、聴いてない？

１時間、２時間、３時間、…。さすがに４時間目に入る頃には、いつ帰るのだろうと頭をよぎり始めた。でもこれは、『Helping Interview　援助する面接』（アルフレット・ベンジャミン　1990年）かもしれないと、状況を読んだ。

「パーソナル・アシスタント」の一つの役割に「聴く」があると考えていた。だから図書館で『Helping Interview』を見つけた時には、うまく言い当ててもらった気がして、買って読んだのはこの1年ほど前のことだった。

聴いた時間は結果的に５時間をすぎた。それとなくこちらが時間を指したから、先方は帰っていったが、そうでなかったから、もっと居たかもしれない。ヘルピングになったかどうかはわからない。でも、よく話せてすこしスッキリした、ということにはなったろう。

翌日だったか、知人の経営者の人と話していて、「昨日は5時間も話していった人がいて…」と軽く話題にしたら、「えっ？！それは料金をとらないと！」。そう言われて初めて、おカネにつなげて考えていない自分を覚った。

2025年1月10日（金）　晴れ

今朝の気温0°C、さすがに寒い。インフルエンザ感染者数は過去最多を記録したそうな。元々あまり人の多いところには行かないけど、気をつけよう。

―　どのようなPAか　（３）　―

『見える仕事の見えない働き』④　奉仕すること（続2）

年を重ねるというのは本当におもしろい。そう実感したのは2012年末のことだった。ある重要な出来事があり、“こんな気持ち、認識を自分がもつことになろうとは…”。

長く生きていると〈自己刷新〉する局面に合う。こういうことがあるんだ、これからもまだまだあるかもしれない。そう考えると、長生きはすてたものじゃないと感じた。

その時からも干支を一巡りしたが、少しずついろんなことがわかってくる、というか、時間が経過すればするほど、紐解かれているようで、それがちょっとした爽快感。

過去のある出来事をたまたま話した相手に、自分にとっては意外なことを指摘される。感じたことを口にだして言ってくれた人たち感謝である。

象徴的な一つは、「えっ、おカネが返ってこないのに、そんな風に考えられるの？！」。

学生時代の親しい友人が借りたまま音信不通になったが、10年後ぐらいに街でばったり会った。先方はバツ悪そうにしていたが、ひさしぶりだし、そのままお茶に誘った。

すんなりついてきた。この間の話をいろいろ聞いた。聞いて、それならよかったと思った。海外を一人旅したというから、ということはある程度は自分らしく、自由に生きてこれたということ。「じゃ、元気で」とわかれた。

この一件を一つのおもしろい話題として雑談で話したら、相手が目を丸くしたのだった。貸したものを返さず、本人は人生を愉しんでいるなんて、それでよく平気でいられね、と呆れられた。

でもそんな風にはまったく考えなかった。文学少女で、音楽好きで、親との縁は薄かったようだけど、いつも明るかった。そういった面が保たれていそうで、それならよかったと。

実はこの一件にはオチがある。また10年ほど経ったときに街でまたばったり会った。詳しくはともかく、音信はこちらから断った。

2025年1月14日（火）　晴れ

日の出時間はまだ７時台、6時半ごろはまだ暗い。今日は新年初の満月で、朝のうちの７：27、だから満月がよく望めた。次の新月が旧暦元日、1月29日。

―　どのようなPAか　（３）　―

『見える仕事の見えない働き』④　奉仕すること（続3）

日本である小さなシンポジウムのために海外から訪れた研究者たちを日本側の受け入れ関係者の一人に30年以上の付き合いになる友人がいた。後日ランチしながら当日の話をきいて、びっくりした。

日本側の誰も〈打ち上げ〉のことまでは頭がいってなかった、余裕もなかった。でも海外組は当然セッティングされているものと期待していた。シンポジウムでの高揚感も手伝って、声もあがった。そのまま近くの居酒屋へ流れた。

「代金はわたしが払った、みんなが興じている間に、だした」。丸くおさまるなら、それでいいと思って、言ったのだった。これは15年ほど前の話だが、その瞬間、続いているワケがわかったような気になった。

余裕またはゆとりには２つあるという。経済的的ゆとりと精神的ゆとり。奉仕はたぶん精神的ゆとりの一つの表れだろうと思う。そういった精神を持って生まれた人もいるだろうし、社会生活の中で鍛錬して少しずつ備えてきた人もいる。大抵は後者ではないか。

いろんな階層の、いろんな立場の人が、ところどころで、奉仕している。必ずそういう人がいる。独立してまもなくそう実感する場面に出会った。その実感は今もかわらない。

「あなたはまた誰かに奉仕しているんだから、いいですよ」。いつも気にかけてくれる方にあらためて感謝の言葉をのべたら、ごく何げなく返ってきた。「恩おくり」が描けていて、実践されている。そう覚って、感服した。もうずいぶん前のことである。

2025年1月15日（水）　雨のち晴

早朝に雨が降った。家を出るときにはやんでいて、午後にかけて晴れてくるよう。今夜から明日にかけてぐっと寒くなるというけれど、日中８℃なら、それほどでもない。ともあれ暖かくしてすごそう。

―　どのようなPAか　（３）　―

『見える仕事の見えない働き』④　奉仕すること（続4）

「日本は無名の人が偉い。目立たないところで勤勉と工夫で日本を支えている」（中井久夫）、この一文を著書の中に見つけた時、自分の見立てはそれなりに共通認識されていることなんだと気づいた。

一個人のけっして広くはない世界だけど、そこここに、奉仕的な人がいる。ライフワークとしてやっている人もいれば、企業に属して本業の中でがんばる人を後押しする。自分に誇れるものがあるとすれば、彼らと世界を共有していることだと、『自業のすすめ』をまとめる過程で覚った。

そんな彼らの別々な人から同じメッセージを贈られたことがある。2007年７月と８月、『あなたの中の最良のものを』（マザーテレサ）。帰ってからゆっくり読んだ。

なぜこれを、ぜひわたしに、と感じてもらったのか。わかるようで、わからない。手渡されるまま、ぱっと見ただけ、理由を尋ねるのもヘンだ。たぶん尋ねたとしても、言葉にするのが難しく、「何となく」ということではないか。それはわかる気がする。

スマホのない時代、友人同士の悩みなど、電話で長々を話し合った。どちらかといえば、聴く側だった。時には堂々巡りの話になるが、こちらも言うことは言うので、なんとも思わなかった。

会食を誘ったのは相手なのに、いつもこちらがアレンジする。けっこう時間をとられるのだけど、率先してやっていた。皆が気持ちよく集まり、愉しめればそれでいい。そんな感じだった。

こういうことに自分では注目していなかった、初回に書いた、『無意識にやって人に喜ばれること、それが本物』（佐藤初女）に出会うまでは。はじめて注目して、なぜ「パーソナル・アシスタント」なのかということも含め、いま現在の自分のあり様がわかった気がした。

どうわかったか、それを言葉にするのは難しい、「何となく」。

2025年1月17日（金）　晴れ

昨日に続き冬晴れ、空をみるだけで、晴々としてくる。日の出時間も今月12日に反転し、これから少しずつ朝にも新しい季節のめぐりを感じるようになる。立春は、今年は２月３日。

―　どのようなPAか　（３）　―

『見える仕事の見えない働き』④　奉仕すること（続5）

「パーソナル・アシスタント」は仕事のコンセプトというより、自分を生きるコンセプトなのだと合点がいって久しい。そう思えることがしあわせなのかもしれない。

しあわせといえば、ごく最近になって、少しは自分も大人になった、と心底思えるようになったことも、さいわい。「パーソナル・アシスタント」のための芽はあったとしても、未熟なままではそのうち枯れる。

大人の入口は、やはり大人。芽をしっかり見てとってくれた大人たちが近くにいたのが決定的だった。しらず知らず導かれていたのだと、長い時間の後に覚った。思い出すたび、よくぞ出会ったもの。

自分側に目をむけ褒めるとすれば、独立を想起し、決断し、実行したこと。混沌期から学習期を経て、自分なりの知的資源を収穫することになった。その一番は自分を知る旅になったこと。それは今も続く。

交流が短い人の中には、ずっと前から今のような人物像をえがいてもらうが、そんなはずはない。なんとか今のところに辿りついていると言うと、意外そうな、でも、ぱっと明るい表情に相手がなる。

師とみる人も何かしら努力を続けている。たぶんそれを見てとり、とっさに希望のようなものを感じて、表情に表れたのだろうとおもう。５年ほど前のこと、すごく印象にのこっている。

努力といっても、よく言うように、無理はいけない。その「無理」の中には、他に迎合して、ということも入る。自分の価値観や志向性とは相容れないのに、臨むと、追って弊害がでる。心身や人間関係などに。

とはいえ、そうはいかない人の方が多いだろうと想像している。そういった人の中に、ある節目で、自分に合った道を捜し始め、偶然にめぐり合わせた時に役に立てるよう、無理はせずでも努力は続ける。そう覚ったのも、遠くない、3年前のことである。

2025年1月20日（月）大寒　晴・曇

夜中のうちに雨が降ったよう。乾燥続きだったから、恵みの雨。なんたって、花粉が飛び始めている。先週初めから瞼が赤くなっていた。気をつけよう。

―　どのようなPAか　（３）

『見える仕事の見えない働き』⑤　守ること

何かの拍子に表れる観念は20秒しか持続しないらしい。危険回避のためにも人間はそうできているという。

そんな風にある瞬間自分の頭に浮かんだ考えの内、大事のものは記録し一覧にしている。たまにそれらを見返すと、当時の心境や状況がよびがえる。試行錯誤、切磋琢磨している姿がわれながら、いとおしい。

書いたものが残るのは二次的なもの。「書く」というその作業と時間をつかって、われにかえり、問い、軸がぶれないよう心身に憶えさせる。そのためにやっているのだとおもう、あえて書くのは。

ただ究極のものは書いておかなくても、しっかり憶えている。ココロの底から確信して、ずっと守っていることがある。独立を決心して動きだしてまもない時のこと。淀屋橋駅ホームの階段をあがる瞬間にあらわれた考えが、それ。

“けっして目先の利益に惑わされてはいけない…！”。好調が続くことはない、必ず苦境に遭う。その時に安易な道を選ぶと、往々にして道は外れたままになる、ビジネスの世界では特に。

まがりなりにも読書を通して、経営の人の世の〈よくある話〉は了解していた。惑わされた後の道のりも容易に想像できた。どんなに大変でも、目先の利益には、けっして惑わされまい…。

全ての始まりの初めに降りてきたこの直感あるいは直観は、天からの声、『転ばぬ先の杖』を授かったように感じる。ありがたい。

駅のホームから階段を5段ほどのぼる間の一瞬であったが、シチュエーションと心持ちは今も鮮明におぼえている、30数年も前のことだけど。

2025年1月23日（木）　晴れ

今日も晴れ、昨日以上に暖かくなりそう。風景も１月の感じがしない。長期予報では「春ははやい」そう。四季はどこへ。

『見える仕事の見えない働き』⑤　守ること（続）

憶えようとおもわなくても憶えていることがあり、守ろうとおもわなくても守っていることがある。前者は「岡潔」のいう「印象」にあたり、後者は「資質」かもしれない。

ところで、守ろうと意識していないことは、何を守っているか自分で気づかない。対象的な場面を目の当たりにした時はじめてハッとする。

同じ機関の同じプログラムで、他の講師の講演をアブザーバー受講していたときのこと、“こういうことはしていないなぁ、自分では…”と初めて気づいたことがある。それは、自分の仕事の宣伝。

これまで数多く講師をつとめてきたが、自分の宣伝をするという発想はまったくなかった。無償でフォローアップするので何かあったら気にせず連絡を、と話したことはあるが、宣伝は一度もしたことがない。

そのことに気づいた。これは、個人的には貴重な発見だった。ということは、まだ他にもあるはず。それらを束ねたものが、その人の「流儀・スタイル」になるか・・・？という考えが浮かんだ。

さて、他に何があるだろう…と自分を見返した。そう、単独の講師のときでいえば、会場には自分が先に入って受講者を迎える。開始前の時間にこちらから声をかけ、場をやわらげる。

そう、その仕事に意味があると感じられれば他の半分、三分の一でも引き受ける。そう、「今度は一緒に食事でも」と自分から誘ったことは、時間が経っても実行にむけて必ず声をかける、などなど。

挙げていくうちに、他者にイメージされていそうな〈自分ならでは〉さの構造がすこし見えてくる感じがした。この一連の観察はそのまま仕事にも生きた。仕事上の新しいツールを創案することになった。

発見があると、発展があるもの。

2025年1月25日（土）　晴れ

今朝もよく晴れている。気温も陽ざしも風も、このところは1月の感じがしない。今日の気温は少し下がる予報だけど、それでも11℃。このままだとこの冬着ずにおわるコートあり。

―　どのようなPAか　（３）

『見える仕事の見えない働き』⑤　守ること（続2）

あなたにとって幸せとは何かと尋ねられて、「守るべきものがあることです」（岡田准一　2006年雑誌Grazia のインタビュー）。

そのココロは、「こう生きたい、という自分の意志はもちろん大切だけれど、いろんな人の想いを、僕はたくさんいただいているんですよ。それも、守るべきものですよね！。

まったく同感。それにしても20代半ばでそう言えることがすごい。「本が人生の教科書だった」というほどの読書家だということをこの時知った。この時というのは、旧知の方から記事のコピーを頂戴して。以来、ファンでもなんでもないけど、いち個人と敬意をもっている。

ときどき冗談めかして人に、「もし独立せず、そのまま会社員だったら、傲慢なまま人生をおくった思います、いまでも十分傲慢かもしれないけど」と話す。独立して混沌を味わって、本当によかった。

『親の心子知らず』というか、最初に認識を新たにしたのは、十代の頃に出会った寺子屋のような学習塾のことだった。当時のあれやこれやを思い出し、どれほどの想ってもらっていたかをリアルに覚った。

仕事でもたくさんの人に出会った。何様でもないけど、何者かではあると見てとってもらい、今も続く関係。そこに意味を感じないわけにはいかない。人の想いを守る、それが自分の意志を守ることにもなる。だから「しあわせ」につながる。

2025年1月30日（木）　晴れ

旧暦でも昨日新年が明け、新旧ともに新春、「立春も」も四日後。ただし来週は近畿でも寒波に見舞われるらしい。そのあと一気に春めくか。長期予報では春は早いらしいから。

— どのようなPAか （3）

『見える仕事の見えない働き』⑤ 守ること（続3）

「バランスのいいものを食べなさい」。早く逝ったせいで遺っている父の言葉は少ない。そのうちの一つ、言われたのは小学3年生ぐらいの時。ひょっとすると、そのときに「バランス」が根付いたか。

仕事をとおして多様な人々と出会った。それは自分の社会勉強にもなった。誰一人として同じ人はいないというこの当たり前のことを実感するし、自分を少しずつ知る機会になった。

ときどき、「そんなバランスのいい人、あまり見たことがありませんよ」を言ってもらう。自分でもそのようだと覚るようになった。

今から20数年前、当時よく会ってお茶していた診断士の知人が近況を話す中で、「腹が立って」、「腹が立つ」という言葉をよく使った。聞いていて、そんなりに腹が立つものかと不思議におもった。

そこで、「その〈腹が立つ〉というのは、単に口癖なのか、本当に感情的に腹が立っているのか、どっち？」。年下ということもあって、尋ねてみる気になった。

すると相手は、ははーんという表情をしながら、「本当に腹が立って！」と即答。そして、「リーさんは、そんなことないでしょ！」。こちらも、「うん、ないなぁ…」と即答。

実際もともとそんなに腹が立たない。本当に怒ったのはこれまでも数えるほどしかない。ただし、その怒りは濃く、対抗は徹底する。その術をもっているという気はする。

ほとんど怒らないけど怒ると徹底する。ある世界に所属はしても埋没はしない。悪人ではないけど善人というほどでもない。そんなこんなことが、今の社会では「バランスがいい」に見えるのかもしれない。

社会、世界はアンバランスの極みを突き進みつつあるようにみえる。それに翻弄され、自分を見失いかねない。これからは意識して「バランスのいい人」を守らなければならないかも、いや、しっかり意識していこう。

2025年2月1日（土）　曇

　早朝は陽もさいしていたが、雲がひろがってきた。夕方には雨が降るらしい。今日から2月、ここから時間のすぎるのがはやい。年度末、新年度を前に世の中もあわただしくなる。季節の変わり目でもあるから、体調に気をつけよう。

―　どのようなPAか　（３）　－

『見える仕事の見えない働き』むすび

　昨年10月下旬に思いたち、自分の仕事のベースを少し紐解いてみた。はっきり意識してではなかったけど、今年で事務所開設30周年になることもあってだとおもう。

　読む、書く、算ずる、憶える、纏めるの５つの知の活動のうち、「まとめる」は事を俯瞰し、気づき、認識の定着あるいは刷新のプロセスでもある。『自業のすすめ』のときにそれ実感した。

　今回はちょっとした「まとめ」なので、それほどでもない。でも大切なことを大切なこととして再認識したし、記録して残るのがいい。たぶん、後にこの意味を感じると思う。2020年に音声でまとめた自業のショートストーリーのように。

　自分の歴史を大きく区切ると独立する前と後。独立志向なんてまったくなかったのだから、劇的変化といっていい。でもその伏線はしっかり自分でつくっている。ふりかえるとそれがよくわかる。

　それに「劇的変化」というのも、見た目の環境変化はそうだけど、内面に目をむける、根っこは変っていない。否、それを変えないためにも、考え、動きを変えてきたのではないか。

　LYK流「パーソナル・アシスタント」は、仕事のコンセプトというよりライフ上のテーマ、と思いいたって久しい。自分をとくまく世界のごく限られた人にはなるが、この道をはずさず、進んでいくとしょう。